

CASE  
2

**2** 口腔インプラント術後の問題点  
**上顎に口腔インプラント埋入術後、  
 頬部に違和感を訴えた症例**  
 [65歳, 女性]



## インプラント体の上顎洞迷入



骨組織表示 CT 横断像

## 所見

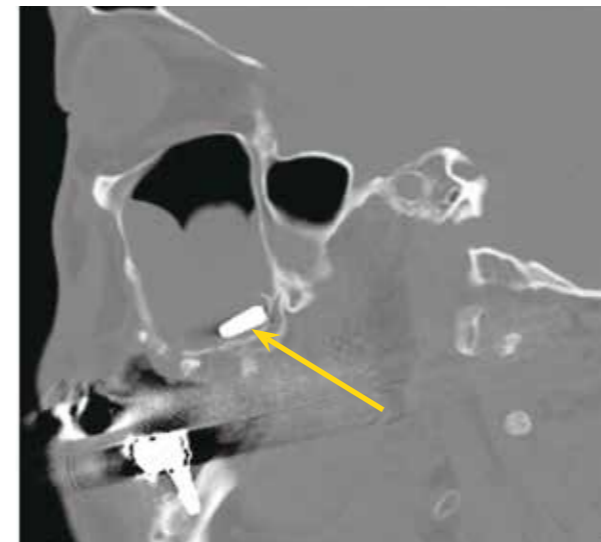
- ・パノラマエックス線画像にて、左側上顎洞内に迷入したインプラント体が認められます。
- ・骨組織表示 CT 横断像にて、上顎洞底部で後壁に近い洞内にインプラント体の迷入および周囲の粘膜肥厚を認めます。

## Impression

左側上顎洞内へのインプラント体迷入および左側上顎洞炎

## Summary : インプラント体の上顎洞迷入

- ・上顎骨は下顎骨に比べ骨壁が薄く、また臼歯部は歯槽骨高径が不足するため、無理なインプラント埋入は上顎洞迷入を招くおそれがあります。
- ・CTにて術前に歯槽骨高径を十分検討し、必要であれば骨造成（ソケットリフトやサイナスリフトなど）を伴う埋入方法を検討することが推奨されます。



同症例の骨組織表示 CT 矢状断像。  
 インプラント体は上顎洞に迷入し、洞底部および後壁に位置し、  
 粘膜肥厚も伴っています。

## 治療方法

- ・消炎後にインプラント体の摘出を行います。慢性上顎洞炎を伴う場合、洞内の肥厚した粘膜がインプラント体の摘出を困難にし、さらに術後出血を起こしやすいので、消炎後に手術を行います。
- ・摘出部位として、迷入箇所からのアプローチは上顎洞瘻孔を生じやすいだけでなく、インプラント再治療を困難にすることが多いので、上顎骨犬歯窩からアプローチを行うことが推奨されます。

## 参考文献

- 1) 金田隆編著：一歩先のパノラマ診断力。砂書房、東京、2013。
- 2) 金田隆編著：第2版 歯科放射線 teaching file。砂書房、東京、2007。
- 3) 金田隆編著：基本から学ぶインプラントの画像診断。砂書房、東京、2011。

プロビジョナルレストレーションの製作と周囲歯肉の調整

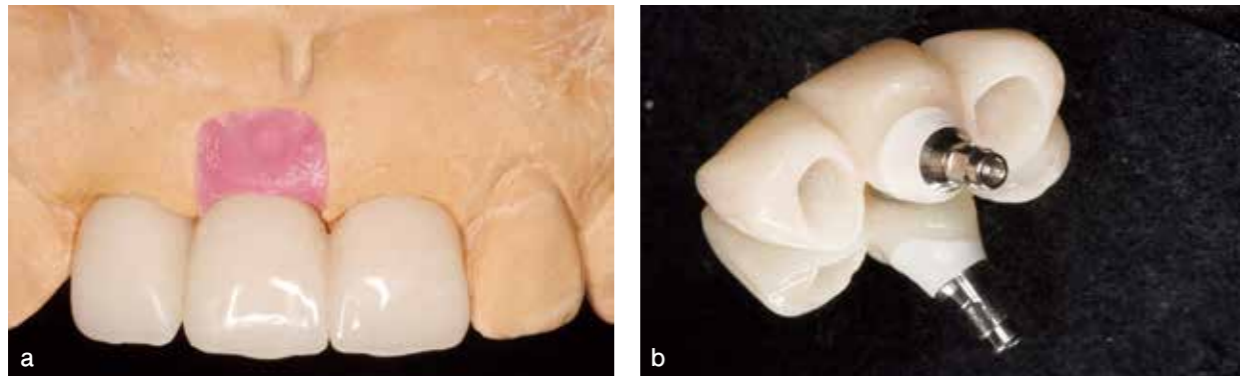


図 V-4-9 a, b プロビジョナルレストレーションの装着をして歯冠周囲歯肉の形態を付与します。8週間の治療期間を必要とします。



図 V-4-9 c, d アバットメントの装着はポジショニングエイドを使用します。

印象と最終補綴

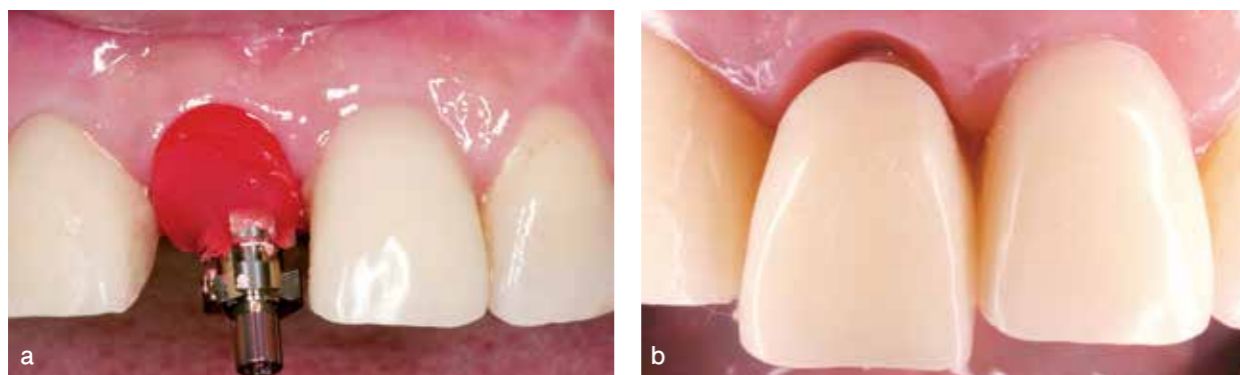


図 V-4-10 a, b 歯肉形態を印象するため個歯トレーを製作し採得します。



図 V-4-10 c, d アバットメントの装着はポジショニングエイドを使用します。



図 V-4-10 e, f  
e: 上部構造物は歯肉透過性を考慮し、セラミックアバットメントとオールセラミックスを製作しました。  
f: 同部の口内法エックス線画像。良好な状態となっています。

コラム5 前歯部の三次元的位置

前歯部審美領域は、インプラントの三次元的な排列位置が重要項目となる。Belslerらが詳細に報告した<sup>22)</sup>。原則として、以下の点が重要になる。

- ① 近遠心径は1.5mmの骨を温存することにより、歯間乳頭の維持につながる。
- ② 頬舌的な位置は最大豊隆部を結んだ線をプラットフォーム（インプラントショルダー）が超えないように配置する。
- ③ 埋入深度は最終補綴の歯頸線から距離をインプラントタイプにより選択する〔ティッシュレベルインプラント（TLI）は2mm、ボーンレベルインプラント（BLI）は3mm〕。



図 V-4-11 a～c 前歯部におけるインプラントの三次元的排列位置

- a: 近遠心径；1.5 mmの骨を温存。  
b: 頬舌的な位置；最大豊隆部を結んだ線をプラットフォームが超えないように配置。  
c: 埋入深度；最終補綴の歯頸部からの距離が TLI は 2 mm, BLI は 3 mm. 図中のグリーンは安全ゾーン。



図 V-4-11 d  
歯間乳頭が確立されている。



図 V-5-52 f, g プロビジョナルレストレーションの装着  
f: やや垂直的な歯肉の不足が確認できます。g: インプラント配置は左右で均等な状態です。

印象と最終補綴

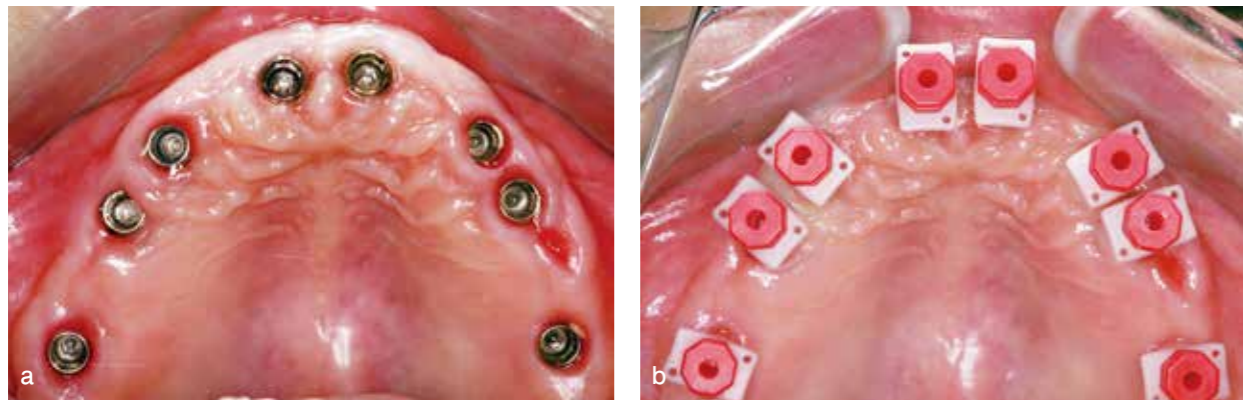


図 V-5-53 a, b  
a: 最終印象時の歯肉の状態を示します。b: 安定していますので印象は単純な方法が可能となります。



図 V-5-54 a ~ c 最終補綴の正面観, 側面観



図 V-5-54 d, e  
d: 正面観の拡大像。垂直的な周囲組織の不足は補綴物で補います。e: 咬合面観。骨造成により、最終補綴は良好なアーチを描いています。インプラント配置との調和が確認できます。



図 V-5-54 f 術後のパノラマエックス線画像  
骨造成した位置にインプラントが配置されていることが確認できます。



図 V-5-55 a ~ d 1年後の口腔内写真  
やや唇側の歯肉に退縮を認めますが、リップラインから審美障害の状態とはなっていません。



図 V-5-55 e 1年後のパノラマエックス線画像  
インプラント周囲の骨は安定しており、垂直的な骨吸収も認められません。